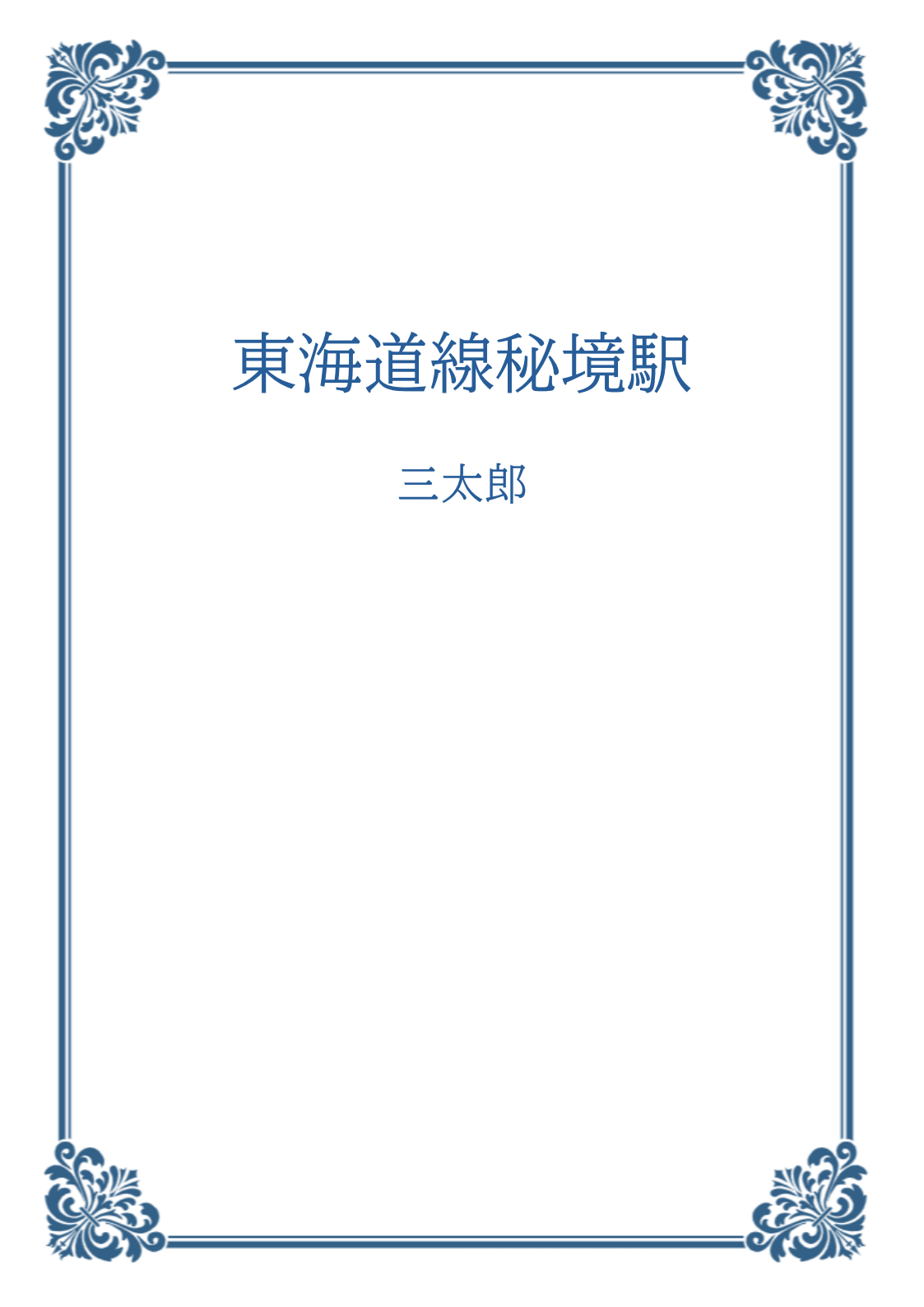




東海道線秘境駅

三太郎

最初の下車駅、根府川駅に着いた。ぼくは、茫洋と広がる海に見とれていて降りるタイミングを逸した。あわててボックスシートを離れドアを抜けようとした。

若い女性が正面からぶつかってきた。反動でぼくは、電車から降りた途端転びそうになった。ホームに片手をついた。女性が電車に飛び込むと同時にドアが閉まった。ドアを挟んで、ぼくたちは瞬間見つめ合った。

（ぼくの方が悪かったのだろうか）

彼女は野球帽を取って、ホーム上のぼくに丁寧に頭を下げた。そのまま電車ごと遠ざかっていった。

冬の根府川駅のホーム。きつと彼女は、氷片のような白波が寄せる相模灘にカメラを構えていたのだ。そこへ電車が来たので、あわててリュックにカメラを押し込みながら飛び乗ったのだ。あわてた者同士がぶつかった。

（ここが、東海道線では最初の秘境駅らしい駅なんだ）

ホームのフェンス越しに、相模灘が茫漠と広がっている。向かいの伊豆大島は淡いグレーの冬着をまとい、寒風に抗わず泰然と海上に鎮座している。東方には、房総半島が細く長い帯となって大海を分断している。

根府川駅は、東海道線で最も海に近い展望の良い駅として鉄道ファンには人気がある。写真を撮るだけのためにホームに降りる人もいる。

ぼくは真冬の寒さに身を縮めながら、跨線橋の階段を上がった。改札口の横にある小さな池には氷が張っていた。金魚が底の隅っこに集まって動かない。

ここは、東海道線には珍しい無人駅だ。

駅を出ると、目の前には一本の大きな桜の木。今は冬木だが、春には見事だろうと思われた。右側には、鄙びた駅前には似合わない瀟洒な建物が大きく居座っている。ＪＡの表示が目立つ。左側には、交番と郵便局が

こぢんまりと並んでいる。目の前の道路を挟んで数軒の民家。昔ながらのたたずまい。人の行き来は見られない。

ぼくは、東の方へ歩を進め、海や駅周辺の景色を四・五枚カメラに収めると、再び小さな駅舎の中へ戻った。暖かい季節になったらあらためて訪れてみよう。この辺りは海を眺めながらの散策にはきつと心躍るだろう。

詩人の茨木のり子も、根府川駅からの景色を詩で讃えている。事前に調べたところでは、山側にはハイキングコースがあり、石橋山古戦場を経て早川駅まで続いている。年度が替わってからの春休みか夏休みには計画してみたい。

次にやって来た下り電車に乗った。ここからはトンネルが多い。県境を越え静岡県に入ると熱海市だ。ぼくは車窓からのビル群を見て、自分の街に近付いたような懐かしさを覚えた。

「えっ、東海道線に秘境駅？ そんな駅あるの？」

鉄道好きのぼくが『全国秘境駅の旅』の本を熱心に読んでいたとき、父が、東海道線で秘境駅を見つけてきたらとアドバイスしたのだ。父は毎日、自宅のある大船から品川まで、通勤で東海道線を利用してはいる。

全国鉄道網の大動脈である東海道線に、秘境駅があるとは到底思えない。しかし、父の逆転の発想に触発された。似た駅を探ってみたくなった。

下調べをし、下車する駅を四つ決めた。根府川、熱海、函南、三島。うち秘境駅候補が根府川と函南だ。中学一年生の冬休み、日帰りとはいえ初めての一人旅だ。ぼくは区切りのいいスタートを切るため、いったん東京駅へ出てから下りの各駅停車に乗った。

二番目の下車駅は熱海だ。ここには思い出がある。

まだぼくが幼稚園の頃だ。父、母、小学生の姉と四人で海岸沿いの温泉旅館に泊まった。この日のことはほとんど忘れてしまっているが、駅前の景色だけは鮮明に残っている。

ミニ公園のような木立を背に、漆黒の蒸気機関車が置かれていた。いにしえの時代を主張する姿に、迫ってくるような力強さを感じたのを憶えている。ちょうど鉄道に興味を持ち始めた頃だ。今でもあの蒸気機関車はあるのだろうか。

改札口を抜けたとき、初めての土地に來たような錯覚を覚え一瞬たじろいだ。様相は一変していた。どこからこんなに集まってきたんだ。不思議なくらい人が多い。それも若い人が目立つ。今住んでいる湘南の大船は都会的だが、ここはそれ以上だ。

正面のビルには、どことなくあのとき見たような印象はあるが、あとは視線の及ぶところすべて新しい景色だ。すぐ横の洒落た駅ビルは混雑しているので、入っていくには抵抗感があつた。サンビーチの方へ行ってみようとしていた意思も萎えた。変わってしまった。

無論、あのときの蒸気機関車もない。

根府川駅とのあまりの落差に戸惑いながら、ぼくは一駅分の乗車券を買った。ここからはJR東日本のSuicaは使えない。

四つの駅のどこかで、昼食休憩を含めて二時間から三時間の散策を予定していた。これまでの二駅は、次の電車までわずか数十分だった。あとは函南か三島だ。

長い丹那トンネルを抜けると、回り舞台のように景色は一変した。異郷の地に入ったようだ。低い山々に囲

まれた間を、電車はスピードを落として進んだ。三番目の目的地、函南駅だ。

駅前は根府川駅よりも広い。それもアスファルト面の広がりだ。バス乗り場、タクシー乗り場、駐車場、駐輪場と。その先は、山波が衝立のように立ちはだかっている。見渡したところ、駅周辺には店や住宅らしい建物はない。

ぼくはバス乗り場を突っ切って、駐輪場横のベンチまで行って腰を下ろした。すぐ後ろは葉を落とした銀杏の太木。離れて見ると、平屋建ての駅舎はかわいらしい。エントランスの洋風の屋根が素敵に見える。ただ背後に崖が迫っているので、景色のバランスを欠いているのが残念だ。

駅舎周辺は小高い位置にあるようだ。見下ろすと、谷筋に住宅がびっしりと並んでいる。溪流の音が風に乘って上ってくる。

ベンチの横に観光案内の碑がある。『原生林といで湯の里』とある。その横にハイキングコースの地図。事前調査で、函南ならばここにしようと思ったところだ。駅スタートゴールの周回ルートで二時間半。高源寺から東方への山間の小径は、熱海日金山から三島玉沢を結ぶ『ひがね道』と呼ばれる祈りの古道だ。

ただ、里山ハイキングとしては真冬と真夏は避けたい。次の三島にするか迷うところだ。三島なら、初めて伊豆箱根鉄道というローカル線に乗る楽しみがある。思案しながら、ぼんやりと坂道になっている車道を見つめていた。

下の方から、こちらに向かって上ってくる人がいた。若い女性のような。近付いてきて目が合うと、互いに「あっ」と口を突いて出た。根府川駅でよくとぶつかった女性だった。

「あら、あなただったの」

彼女も驚いたようだ。長い坂だったのだろう。息が弾み頬を染めている。あのとさと同じように帽子を取っ

て頭を下げた。

「さっきはごめんなさい」

「あ、い、いえ。ぼくの方こそ、ごめんなさい」

間近で大きな瞳に見つめられてあわてた。自分でもどぎまぎしているのがわかって恥ずかしい。

「もしかして、わたしたちって同じことに関心があるのかもね…」

彼女はそう言って、ぼくのすぐ隣に座った。膝が擦れ合うような近さだったので、ぼくはわずかに横にずれた。

彼女は、今来た道をふり返りながら指さした。

「この坂の下の方が住宅地になってるの。下っていくと川にぶつかって、橋の横に三つ目ガードの土木遺跡があるの。珍しいものなので見に行くといいよ」

「そう。じゃ、行ってみます。どこへ行ってみようかなって迷っていたところなんで…」

「あなた、中学生の一人旅のようだけどどこから来たの？」

「大船です。このあと三島で降りて、富士の湧水を辿るハイキングをしようかと思って…」

口に出したことで、曖昧だった予定が決定になった。

「わたしは高三。うちは豊橋なの。だからこの先も西に向かっていくの。次に降りる駅は磐田市みくろりやの御厨みくろりや駅。令和の時代になってできた新駅なの。でも、ここよりずっと開けてる。来るとき電車の窓から見てわかった」

「高校三年なら受験生じゃないですか」

「そう、あと二か月で大学受験。でもね、好きで夢中になっているものがあると、ついでのことも頑張れるんだ」

受験がついでという言い方がぼくにはおかしかった。

「豊橋から西の方には、秘境らしい駅ってあるんですか」

「うーん、あるとすれば、彦根から大津までの南滋賀辺りかな。通ったことあるけど降りたことない。東海道線って東京から神戸まで百五十くらい駅あるけど、やっぱり秘境駅ってないよね」

「その中でも、根府川や函南はいい選択だったといえるっていうこと？」

「そうかもね。でもね、その駅だけ取り上げても秘境らしい魅力は見えてこないんだ。函南駅だったら、その両隣、熱海と三島にも降りてみるといい。どちらにも新幹線が止まるし、観光客で賑わっている。三駅をセツトにすると、函南駅の魅力がわかってくる気がするな」

旅は点として訪れるよりも、線として辿ると面白いということは、ぼくも聞いたことがある。彼女の話であらためて実感した。このままもう少し話を続けたくなった。

「豊橋駅って飯田線が出てる駅でしょう？ 乗ったことないけど」

「そう。知ってる？ 飯田線って、JR東海ではいちばん秘境駅の多い路線なんだよ」

「ええ、知ってます。いつか乗ってみたいと思っていて……」

「わたしね、去年の春に飯田線の秘境駅巡りをしたんだ。桜の時期にそういうツアーがあってね。秘境駅号のヘッドマークを付けた臨時急行なの。ツアコンが付き添っていて、秘境駅弁当というオリジナル弁当も配られて、秘境駅巡りにしては快適だった」

「いくつかの秘境駅に留まったんですか」

「六つだったね。それが面白いの。それぞれの駅に三十分くらい留まるでしょう。そんなことが続くので、急行なのに途中で鈍行列車に抜かれるの。それにもう一つ気付いたことがあった。何だと思う？」

「うーん…」

「秘境駅に着く度に全ての乗客がどっと降りる。五十人以上だよ。これっておかしいって思わない？」

「そうか、秘境駅巡りなのに、秘境駅ではなくなってしまうんだ。ツアーなので」

彼女はスマホを操作し、収めてある旅行の写真を見せてくれた。確かに、どの駅も辺境の地なのに臨時的に賑わっている。

「わたし、今年の春休みに、普通ダイヤで各駅停車に乘ろうと思ってるの。これだと本物の秘境駅を体感できる。秘境駅らしさを味わえる。日帰りでせいぜい二駅つてところだけだね。小和田駅こわだと田本駅たもとに降りられればいいかなって」

「小和田と田本って、全国秘境駅のベストテンに入っている駅だ」

「そう。旅行作家が私鉄も含めて全国から百の秘境駅を選んだ。ベストテンに入るといことは、秘境中の秘境ということだね」

彼女はもう一度自分のスマホを見て、何かに気付いたようだった。ついと立ち上がった。

「あ、こんな時間。下りが来る頃だ。行かなくっちゃ」

彼女はリュックを背負い直そうとして、「あ、そうだ」と言いながらリュックをベンチに置いた。立ったまま中から小さなバッグを取り出した。中を開けて一枚の切符をばくに差し出した。

「この硬券の切符、わたしのお守り代わりだけどあなたにあげる。根府川駅でびつくりさせてしまったお詫び」

受け取ると、『小和田駅入場券』とある。小和田駅は、湖底に集落を抱いたダム湖のほとりにある。この駅のもう一つの特徴は、静岡、愛知、長野の三県の県境に存在するという珍しい位置取りだ。

「もちろん、小和田駅では売ってないよ。これ限定品で、豊橋での『秘境駅祭りイベント』で手に入れたの」
彼女はあらためてリュックを背負うと、ぼくに笑顔を向けて手を振った。踵を返し足早に駅へ向かった。二度目の出会いになった函南駅前での弾んだ時間は、不意に終わってしまった。もっと話すことがあったような気がしてならない。お互い名前も訊かなかったし、写真も撮らなかった。

函南駅は、普通の旅行者がただ降りただけでは印象に残る駅ではないだろう。それでも、出会いがあれば駅の景色は変わってくる。ぼくは彼女の背を目で追いながら、ここが、自分の胸の中にいつまでも残っていきそうな駅に思えてきた。

彼女が視界から消えると、手元の小和田駅入場券に視線を落とした。新しい旅情が湧いてきた。

（小和田駅か。ぼくも、春になったら飯田線に乗ってみようかな。もしかしたら…）

三太郎さんの昨年の作品『ミスディレクション』は
以下の二次元コードから読むことができます。



とうかいどうせんひきょうえき
東海道線秘境駅

2025 年 10 月 25 日 発行

著者 さんたろう
三太郎

令和 7 年度 函南町立図書館 8 月～11 月 Y A 展示・企画冊子

編集・製本・発行 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号 055-979-8700

住所 419-0122 静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

東海道線で、秘境駅を探
す小さな旅に出た少年。旅
先で、一人の若い同好の女
性と出会う。つかの間の出
会いと別れ。彼女からもら
った小和田駅入場券で、少
年の胸に旅情の灯が点る。
新たな秘境旅への憧れが…
…。

